

志麻里風土記続

郷土の歴史については前回で二応
終わったので、今回からはその補遺
のつもりで、断片的なものにはなる
と思うが、その後にはわかったことな
どについて述べてみようと思う。

「法雲寺の由緒について」

町内父木野の法雲寺の由
緒には非常に興味深いもの
があるので、今回はそれを
紹介しよう。

法雲寺の由緒については、
筆者の知るころでは三通
りあると思います。

その一は寺社由来書(宝
暦八年藩侯に報告したもの)
に記載のもので、

「この寺は、本寺は備後国
深津郡福山賢忠寺で、禅曹
洞宗法雲寺という。この寺
は永徳元年(一一三八一)の
建立で、開基は玉岫周宝和
尚といわれる。元、臨済宗
京都紫野大徳寺の支配清泉
寺の末寺であったが、思う
ところがあって賢忠寺の末
寺となり曹洞宗となった」。

その二は水野記に記載さ
れているもので、

「この寺は禅宗で瑞龍山宝
雲寺という。また、法雲寺
とも書く。本尊は釈迦如来
で、延文二年(一一五七)
杉原常源が建立した。開山
は夢想国師の弟子で玉岫周
宝和尚と伝えられている。
寺領百貫を与えられていた
が毛利氏がこれを没収した。
末寺は嶋利村能求寺・随円
院・善福寺・南泉庵・この
外三カ寺あったが荒廃した。
その三は西備名区に記載さ
れているもので

「この寺は禅宗法雲寺とい
い、天正年中(一五七三)法
雲和尚の開基という。

法雲は甲州武田家の一族
某(其名欠)の男で、出家
して恵林寺に住していた。
天正年中洛陽(京都)妙心
寺の快川和尚(名は紹喜、
美濃の人、妙心寺仁仙宗寿
和尚の法嗣)が武田家の招
きによって恵林寺の住職と
なった。以来法雲はこの人
の教えを受け、その法嗣と
なった。

天正の末、織田信長が武
田氏(勝頼)をばした時、
武田の敗将佐々木六角が恵

林寺に隠れていると聞いた
信長は、恵林寺に対しこれ
が引き渡しを迫ったが、快
川和尚は僧法を守ってこれ
に従わず、信長は怒って寺
僧ともに焼き払わんと、僧
達百人余りを山門に押し上
げ、火を放ってこれを焼い
た。この時法雲は、快川と
共に寺を守って焼死しよう
としたが、快川は法雲をさ
まざまにだめ、今はここ
を去って時を待って武田家
復興を期せよとさとし、自
らは「安禅必ずしも山水を
須いず、身頭を滅却すれば
火も自から涼し。」の有名
な偈を残して火中に滅した。
法雲は涙ながらに西国に下
り、さいわい禅法授受の身
であることから、ここ父木
野に止まり一寺を建立し、
法雲寺と名付けてこれに住
した。

元和五年(一六一五)水
野日向守勝成が、備後六郡
と備中小田、後月(一部)

二郡の領主として福山に築
城してこれに在城の頃、こ
の甲州の僧が父木野に来て
一寺を建立した話を聞かれ

て、ざためし武田家の名有
る人に相違あるまいと思わ
れ、それならば帰俗させて
召し抱えようと、遊獵の折
この寺に立寄り対面された。
水野侯は、和尚の人品ま
ことにすぐれたるを見て、
自分の推量の違わなかった
ことを喜びさまざま話がは
ずんだ。話が甲州の事に及
び、和尚も我を忘れて軍事
の話となり、ついに武田家
にまつわる軍法秘事を語り、
さらに水野侯の問いに答え
て、その秘書を所持してい
る事まで語ってしまった。
水野侯喜んで是非一覽した
いと言われた。和尚答えて
言うに、今自分は武士を捨
てて仏に仕える身、その書
は家に秘して他見を許さず、
後日武田家復興の時その人
に渡すべきもの故、お目に
かけるわけにゆかないとこ
とわった。しかし、水野侯
たつて披見を所望され、つ
いにことわりきれず暫時の
間と約して差し出された。
この書は桐の小箱に納めら
れ数百丁(ページ)あった
という。水野侯喜び帰城、

書き写そうとされたが容易
でなく、偽書を箱に入れて
返された。和尚この書をあ
らためて偽書であることを
知り、水野侯に真書の返却
を強く求めた。水野侯大い
に怒り、僧の身でありなが
ら軍書をこれ程までに大切
にするとは不審であると、
ついに和尚を召し捕り、備
中神の島に流刑に処した。
和尚は憤激して、配所
において食を断ち、心中で調
伏の祈り続け遂に遷寂(死
去)された。その後、水野
家にはたたりが続き、つい
に五代目松之丞二歳にして
幼逝。水野家は改易となっ
た。その跡を幽に継いだ結
城氏に至っても、なおその
怨みは解けなかったという
ことで、和尚の年回(法事)
には弔使を立てて追善供養
されたという。

(その三については筆者が若
干の修飾を加えた)

参考 寺社由来書、郡誌続編

西備名区 水野記

文化財保護委員 松井正夫

善養院物語

前回は父木野法雲寺の由緒を紹介し、開山法雲和尚と、福山藩侯水野勝成の話を書いたが、実はこれと同じような話がほかにもある。隣の油木町の話で三和町内の話ではないが、広い意味では郷土の話と言ってもよく、また、話のなかの一方の人物は、法雲寺の話と同じく、時の郷土の藩主水野勝成であるので、世の中には似たような話もあるものだという意味で、今回は善養院の話を紹介しよう。

後光明天皇の慶安年中、油木村の宗兼に善養院という面相醜怪な道士がいた。豊松村米見に奪入りしたが、のち息の教仙に後を継がせ、

仙養ヶ原に草庵を結んで仙養坊と稱し隠棲した。仏に帰依じて一心に真言の密教を修めてその奥義に通じ、法力自在の修験者として近隣に名を知られていた。とくに貝（法螺貝）の妙技を体得して、彼が貝を吹くと麓の家々の鍋釜が割れると言われる程で、その音は十里の遠きに達したという。

これを伝え聞いた、時の藩侯水野勝成は、仙養坊を召し抱え戦陣で貝を吹かせたいものだと、使脚を以てこの旨を仙養坊に伝えさせた。仙養坊答えて「ありがたい御説なれども、貝は仏器なり、一度これを吹けば死者を生かし障魔を払う妙具である。これを軍用に使用せんこと甚だ宜しからず」とことわった。

勝成はさらに「是を仏家に用いて仏果を

得んこと、武人これを用いて軍陣に益あり。遠く千里の外に合図し進退を得んと汝が言う如く何に用いるも道あり」と説いて命令に従うよう諭したが、仙養坊は

「軍陣に一命かけて進退し、一声あやまるときは数万の命を損う。仏具を用いて数万の人を修羅道に陥しいること我が心にあらず」と固辞した。

勝成は大いに怒って家臣に命じて彼の面相をあらためさせ、その醜怪なるを聞いて「その面相の如く悪党ならん。長生きせば必ずや人に禍を及ぼし、この世の妨げとならん」と刺客を仙養坊の草庵に遣わし、捕らえて草庵の井戸に入れ石子詰めにした。仙養坊の呻き苦しむ声が七日七夜遠くまで聞こえた。そして命絶える時は原の上空には暗雲が

立ち込め雷光きらめき雷鳴轟き、この世の終わりを思わせるようで、人々恐れおののいたという。

この後水野家には不幸が相つぎ、五代勝岑二歳で幼逝、嗣なく改易となった。それでも、徳川に縁の深い水野家だったので、二代勝利の弟勝忠の孫勝長に水野の名跡を継がせ、後には下総国結城で一万八千石を与えられたが、この結城氏にまで崇りがあるとかで、仙養坊の年忌には必ず使者を遣わして坊の菩提を弔わしめられたという。

また、この当時凶年相つぎ、里人たちは仙養坊の崇りであろうと、原に一祠を建ててこれに祀った。仙養坊神社という。先年付近から錫杖と鈴が発見されたという。仙養ヶ原という名は善養が訛って稱え出されたものであろうともいわれる。

以上が善養院物語であるが、この話は油木方面では仙養坊物語として、また、近田・豊松方面では善養院物語として民話の形で伝えられている。「三備史略」や「西備名区」に載っているところを見ると、その著者がこの地方に伝承されている民話を収録したものと思われる。

このように同じ趣の話が異なる地方に伝えられていることはよくあることで、星居寺の由緒の中に出てくる、同寺にしばらく住んだと伝えられる空鉢上人の飛鉢の秘法の話は、これとそっくり同じような話が、兵庫県加西市の法華山一乗寺にも伝わっている。

(この項終わり)

参考 「三備史略」「西備名区」油

木の民話「仙養坊物語」神

部泉「郷土話物(歴史伝説)」

志麻里風土記続(三)

中世における郷土の豪族 「馬屋原氏考」(一)

中世における郷土を代表する人物は、馬屋原但馬守であると言つて誰も異を称えないであろう。そして、この但馬守を中心とする馬屋原一族が、郷土を代表する豪族であり、神石郡内豪族中の最右翼であったことも誰もが認めるところであろう。しかし、それでありな

がらわれわれはこの馬屋原一族について知るところがあまりに少ない。これは馬屋原氏に関する資料があまりに少ないことによることは勿論であるが、わずかに伝わる資料から窺える馬屋原氏の系譜と、その一族の戦乱時における去就が複雑で、容易には理解し難いことにもよると思われる。そこで散見する資料(古記録)を整理統合して、理解し易い体系的なものにしてみようと思つてこの稿を草した。これを始めた時筆者の手許にあった資料は、「神石郡誌」「同続篇」「西備名区」「備後古城記」「備中府志」等で、このうち最も多くを記してあるのは西備名区で、次ぎが神石郡誌である。郡誌続編のこれに関する記録はほとんど西備名区のひき写しである。西備名区(九十卷)の著者は、問題の馬屋原氏の末流と言われる。当時品治郡向永谷村(現福山市駅家町)の馬屋原呂平であるからか、馬屋原一族の記述はかなり多い。だが、その内容は容易には理解できな

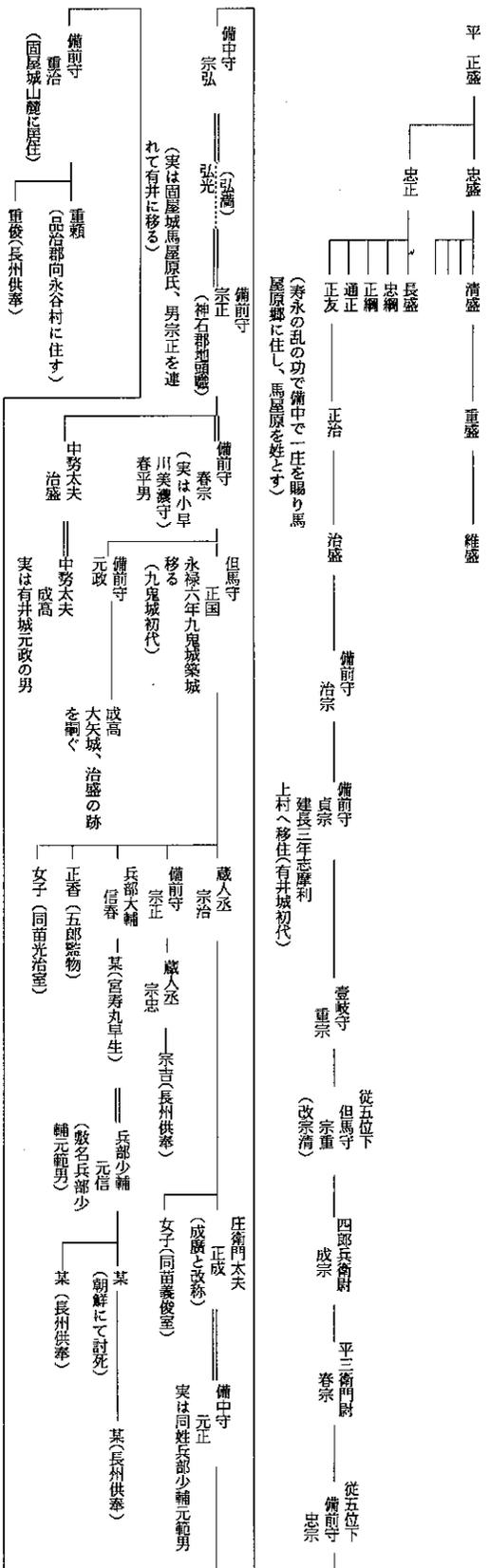
きない。多くの人名とその事蹟が記されているのだが、その人物と人物の關係が書かれていないものが多く、これが理解を妨げている。神石郡誌の記述もあやふやで、同じ二人の人物を親子としたり祖父と孫と記したりしている。さまざま苦心の末二通りの系図を書き上げた時点で、友人から他にも資料のあることを教えられた買求めもして、それらを参考にし前記二通りの系図を改めて考察し、加除訂正を加えて作り上げたものが別掲の二通りの系図である。(今回は紙面の都合で一通だけを載せた。)

勿論これが完全なものとは思わないし、何か新しい資料が見つければ訂正の必要も生ずるかもしれないが、現在の資料で見える限り考える限りでは、これ以外には考えられない。以下この二通りの系図を軸にして馬屋原氏を見てゆこうと思う。

(以下次回)

(参考文献 多数であるので最後にまとめて記す)

馬屋原氏系図 (その一、平氏系〈有井城系〉)



註) 宗正でない。

志麻里風土記

(続五)

中世における郷土の豪族

「馬屋原氏考」(三)

(承前)

(九月号掲載の系図参照)

有井城の第二代目は重宗で、一名平三郎、藏人允と
いい壹岐守を称した。

第三代は重正で一名平五郎
と称したという。

第四代目は宗重(改宗清)で、またの名を平三郎・四郎左衛門尉ともいい、壹岐守を称した。神石郡誌によると宗清(重宗)は元弘の乱に桜山に攻められ落城とあるが、これは次の五代成宗が京都に向向しているときのことと思われるので、それと一緒に述べる。

第五代成宗は四郎兵衛尉ともいい、元弘の乱の時六波羅の召しに応じて京都に

あったが、備後では宮内(吉品郡新市町)の城主桜山慈俊が、河内の楠正成の

挙兵に呼応して挙兵、近郷の将士を招集した。上洛中の成宗にもこの報はもたらされた。だがこの時亀石城

の岡田孫八郎や、有井城の留守を守っていた宗清らはこれに感じなかった。そこで桜山軍はまず亀石城の岡

田孫八郎を降し、ついでは井城に攻め寄せた。この時京都に居た成宗は急遽帰郷

したらしいがまにあわず、その間有井城は一旦落城したのであろう。それが前記のように郡誌に宗清桜山のため落城と記されているの

だろう。帰城した成宗は和を乞い桜山軍に従って働いたが、笠置落城楠正成自害(実は偽死)の報が伝わっ

て、桜山慈俊は自刃し軍兵四散した。やむなく成宗は

宮下野守(現新市町亀寿山

城)とともに、武命に従い、のち足利氏に属した。

第六代春宗は平左衛門尉春宗と称し、足利尊氏上洛の軍に従い本領を安堵された。

第七代忠宗は、藏人丞、備前守を称し従五位下であった。郡誌の記載によると、忠宗は正平四年(二三四九)

九月十三日、高師直の命により足利直冬と納津城に攻

めんと、備後の武将宮兼信(新市亀寿山城)杉原利高

(府中八尾城)らとともに二千余騎を發し、海陸二道より進み、川尻肥後守幸俊、磯辺左近將監らを破り、遂

に直冬を肥後に走らしめた。とある。また「西備名区」によると、観応の軍(足利氏の内訌)に宮下野守(新市亀寿山城)とともに参加、貞治元年(一三六二)京都

にて討死にしたという。

第八代は宗弘でまたの名平五郎、備中守と称した。福山城鏡櫓文書館蔵、高田文庫の「向永谷馬屋原家系図」によると、宗弘は大内左京大夫義興と

堀籠城の御将軍家御出馬の軍に従い永享元年(一四二九)死す。とある。

宗弘には嗣子がなく、

「固屋城主同苗弘光(弘満)台命によって家事に与り、其の男を以て家に

に継がしむ」と西備名区にみえる。したがって、正式に家を継いだのは弘光の男

宗正で、宗正弱年かなにかで、しばらくの間弘光が家事を見たのであろう。前記

高田文庫の「向永谷馬屋原家系図」には弘光が載っている。別葉系譜(九月号所載)にも弘光を入れたが、これは飛んで九代は宗正とする。

第九代宗正は、右記のように固屋城主弘光の男でおそらく次男であろう。系譜

も次男とした。藏人丞・備前守の守を称した。文安三年(一四四六)神石郡地頭職に補せられている。宗弘の

女を室とし、山名(宗全)家に属したが応仁二年京都合戦で西陣に於いて討死した。

(以下次号)

(参考文献は多いので最後にまとめて記す)

松井正夫



有井城跡

志麻里風土記(続六)

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(四)

(承前)

第一〇代春宗は実は小早川美濃守春平の男で五郎と言ひ、初め元宗と称したがのち改めて春宗とした。また備前守を称した。室は山内土佐守通資の女といわれる。応仁・文明(一四六七〜一四八六)のころ大内に属し、永正五年(一五〇八)足利將軍義植の上洛(義植は細川政元に追われて周防の大内義興を頼って数年を過ぎ、政元の死を聞いて上洛した)の時、備後の人宮若狭守秀景、三吉式部少輔隆景、山内大和守直通、山名宮内少輔忠勝、式名兵部丞元綱、木梨治部太夫通経、榑崎三河守豊景、その外備中・備前の将士とともに義植に供奉したといわれる。

九代宗正には治盛という

男が居た。治盛は三郎と言ひ中務太夫と言われた。これがなぜか分かれて大矢に築城して移った。大矢城の初代城主である。そして、有井城の方は前記のように小早川から春宗を迎えて継がせている。

春宗の子は二人居たように、正国と弟元政である。永正年中(一五〇四〜一五二〇)雲州尼子は防州大内と備後を争い、しばしば戦ったが勝敗決せず、その時正国はたびたび尼子に従ったが、弟元政は大内に従うと言ひ兄弟不和となり、備中平川(紫の城の平川氏)に寓居した。(神石郡誌には、

平川の紫の城の平川平三郎左衛門の聳となり、平川弾正忠観実と名乗り布賀に住し……とある)平川氏は毛利に属して功あり、毛利家に断つて正国を志摩利に帰した。帰郷した正国は九鬼に築城してこれに移った。千時永正六年(郡誌)。九鬼城馬屋原氏の初代である。したがって有井城に残った

弟元政が有井城の一代である。

第一一代元政は蔵人丞・備前守を称した。そして兄正国同様毛利に従った。後に石州大森に所替えとなり移住した。元政には男・成高が居たが、成高は大矢城の治盛の跡を継いだので、元政の後には九鬼に移った正国の次男宗正(政)が継いだ。

第一二代宗正(政)、九鬼城の正国の次男で、兄宗治は父正国の九鬼城を継いでいる。宗正は又の名平右衛門と言ひ備前守を称した。ここで一つ問題がある。それは「備中府志」に、布賀の葛葡城の城主は正国の次男であると書かれていることである。次男と言えは正国の宗正のことになるわけだが、そうだとすれば別紙系図(その一)にこのような形で出てくるのはおかしい。しかし、布賀の葛葡城の城主に正国の子がなったということはありそうなことである。正国も一

時期平川氏に寄寓していたというから、帰郷の時子供を置いて帰ったといふことは充分考えられることだ。ただそれは今ここで問題にしてはいる宗正ではあるまい。系図等には載っていない三男・四男が居たのかもわからないし、あるいは庶流であったか今後の研究に俟つべきものだろう。

宗正が有井城一二代目は違ひないものとして、また一つ問題がある。この系図からすれば一三代目は宗忠ということになるわけだが、そうすると、系図に宗正の弟として載っている信春の筋は何かということである。信春や元信の事蹟はまた述べるが、これらは大した人物で正国と並んで馬屋原氏を代表するような地位に居たらしい人物で、部屋住みとか傍流などとは考えられない。どう考えるべきか、さまざま思いめぐらしているときふと気がついた。それは神石郡誌の記述で、「梨迫城」馬屋蔵人宗正の

居、城江の梨迫にあり、宗政は正国の次男なり。

と二行に書かれた記述である。梨迫城は有井と同じ城江にあり、しかも有井城のすぐ近くにあつてその枝城と考えられている城である。そこで次のように考えた。宗正は元政が大森に移った後を襲つて有井城一二代目を継いだが故あつて梨迫城に隠居した。そしてその跡を弟信春が継いだ。こう考えるとだいたいうまくおさまる。これは、筆者の単なる憶測や独断ではない。前記のような神石郡誌の記述にもとづく推論である。そこでこの考え方で、宗正梨迫城へ隠居の後を弟信春が継いで、これが有井城の一三代目とした。

(以下次回)

(参考文献は後日まとめて掲載する)

松井正夫

志麻里風士記 続七

中世における郷土の豪族

「馬屋原氏考」(五)

(承前)

第一三代信春は正国の三男で、宗治・宗正の弟である。又の名を四郎と言ひ兵部大輔とも言った。信春は備後における大内方の国人衆としては重きをなしていたよう、大内義隆が陶晴賢(隆房)らに殺されて間もない天文二十年(一五五一)十月六日付けで、晴賢や大内氏宿老連署でこの度の事変は毛利氏とも談合していること、義隆のあとに豊後から大内義長(豊州八郎)を迎えることなどの重要な機密を知らされ、備後の同志たちに伝えるようにとの書状を送られている。

(广大教授河合正治氏油木豊松民族資料緊急調査中人物環境歴史的背景・萩藩関関録馬屋原山三郎家) またこの後毛利氏が陶晴賢を討ち、かれの奉ずる大内義長

を周防・長門に攻めた時、毛利摩下の部将として出陣しているといわれる。(同前記、河合氏) (毛利家文書二二五号) また弘治三年(一五五七)二月二日の備後国衆連判の起請文(毛利家文書二二五号)には馬屋原氏を代表して署名している。(備陽史探訪会田口義之氏備後の山城・九鬼城跡) 信春の男宮寿丸は早世したので、元信を養子に迎え後継ぎとした。

第一四代元信は小輔五郎と言ひ、又のちには兵部大輔と言ひ、老岐守を称した。元信は毛利元就の庶弟(毛利弘元の六男)相合元綱の孫である。(別流、源氏系の一代義政のあとを継いだ元範の男である。)

元信は永祿十二年(一五六八)二月七日付で「備後志麻利庄式百五拾貫之地同郡豊松四ヶ村四百四拾貫余地之事全可有知行候仍一筆如件」という毛利元就・輝元の連署状をもらっている。(同前河合正治氏・同前田

口義之氏) 毛利家から志麻利庄式百五拾貫の地と、豊松四ヶ村四百四拾貫余の知行を安堵されているのである。志麻利の庄は後に志麻利十一ヶ村といわれた小島・折口・酒屋・末元・龜石・上・常光・光末・光信・父木野・重藤のことと思われるが、この全部の知行を安堵されたのではなく、この中で二百五十貫の地の知行を安堵されているのである。豊松四ヶ村は、後の上・下豊松の外油木町の南部をも含む地であろう(前記河合正治氏)といわれる。

一貫が米の石高にして何程かは時代によって違いがあり、地方によっても違いがあるようで一概には言えない。備後古城記には千貫につき五千石と記されたところがある。(亀治山の項) また知行一貫は田千歩(現在の三反三畝十歩)とか、一貫は一石、また一貫は五斗位ともいわれる。大内・尼子氏の頃の公称貫高は一貫一石とされていた(広島

県史・中世編) ようで、これに従って置くこととする。元信は天正末年(一五九〇頃)にも神石郡内で八百六拾三石(年貢高)の知行地を持っていたともいふ。(前記田口義之氏) また、周防国都濃郡内で六拾七石余の地を給されたともいふ。天正二年末から三年にかけて備中の三村氏と毛利氏と戦ったが、この時元信は兵部大輔を名乗って出陣している。三村氏は当時備中きつての大族で、本拠は高梁松山城で当守元親がおり、新見の杠(ゆずりは)城・矢掛の猿掛城、総社の鬼ノ身城や、川上郡川上町の手ノ城(国吉城)、同幸山城(高山城)などみな三村氏の支族が拠っていた。毛利氏の三村攻撃は備中口を塞いでいる手の要害(手ノ城)から始められたが、この時先鋒となった馬屋原兵部大輔と平川氏(平川の紫ノ城)は油木・豊松地方の武士を率いて、穴戸・阿曾沼・平賀・熊谷・天野・田総長井

氏らとともに、毛利輝元に従った。この戦いで馬屋原敵の首級をあげたという。元信はこの後、織田勢との合戦にも毛利方の部将として、各地の城番をつとめるなど活躍している。(萩藩関関録四一) 子息彦右衛門が朝鮮の役において戦死したのちも、元信は老岐守を名乗り近世初期まで生存したらしい。毛利氏萩移住後の慶長十年(一六〇五)に萩藩士のおもだった者が輝元に差出した連署起請文の中に馬屋原老岐守の名が見えるといわれるから、慶長五年の毛利氏萩移住に従って萩に移ったものであろう。

第一五代 某 彦右衛門 といったらしいが何と名乗ったかわからない。前に触れたように朝鮮で戦死した弟某は宮松と言ったらしいが何と名乗ったかわからない。毛利に供奉して長州に移っている。(以下次回) (参考文献のちにまとめ掲げる。)

志麻里風土記 (続)

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(六)

(承前)

第十六代 某 「宮寿備後守」と「向永谷馬屋家系図」にある。毛利氏の長州移封に供奉して萩に移った。

以上でこの系流の馬屋原氏の系譜事蹟を終わるが、

この流の末はすべて長州に移ったことになる。それはそうであろうが一つわからないことは、長州移任の際、先祖の墓まで移したのであるろうか。十何代にわたる墓をである。有井城にも梨迫城にもそれらしい墓は見当たらない。墓石まで持って移住したとはちょっと考えられない。菩提寺がどこであったかもわからない。近くに月光寺、多聞寺、安養寺と廢寺の名は残っているが、宝暦八年の寺社由来書にその名が見えないからそれ以前の廢寺であろう。多聞寺、月光寺については、

薬師如来の座像(多聞寺のものか)が残っているだけで他に、何も無い。付近にそれらしい墓石もない。わずかに安養廢寺には、開山権僧都朝意と、中興伝燈大庶黎法良恵上人の位牌の他に、永禄八乙丑年

自光院前土州大守大勇全功
大禪定門 尊位
二月九日 左近太夫政次
公父馬屋原土佐守政重

瑞円院殿前周州大守大安知
勇大禪定門 尊位

寛永九壬申天
瑞円院殿前但州大守宗綱大
二月廿日 居士 尊位

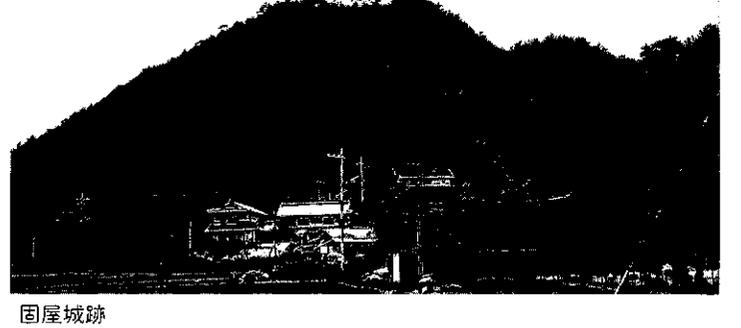
の三本の位牌が残っている。院殿号、大禪定門、大居士など城主の位牌らしいし、特に一本は馬屋原土佐守政重の氏名があつて、有井城一族のものではないかと思わせるものがあるのであるが、有井馬屋原氏の中に政重、また土佐守、周防守の名は見えない。但馬守は、

正国と有井三代の重政の二人がいるが、いずれも名前と年代が違う。さらに村内に随円寺(現在瑞円寺、曹洞宗、古くは臨濟宗)と正覚寺(日蓮宗)があるが、有井馬屋原氏との関係が聞かない。更に今後の研究が必要である。

(三) 源氏系の馬屋原氏 (固屋城系)

この流れは、八幡太郎といわれた源義家の弟の源義綱が、後三年の役の功により左衛門督に任ぜられ、上総国馬屋原庄を賜りこれに住し、間もなく長男義重を残して、他の子を残して京都に引き揚げた。馬屋原庄に残った義重は在地の名をとって馬屋原氏を称した。これが馬屋原氏の祖である。父義綱は、その弟である義光が兄義家の跡を継いで源氏の嫡流になりたく思つて、義家の嗣義忠を討つた同族の争いにまきこまれて、ついに佐渡

に流刑されて自殺。この争いで義綱の多くの子も討たれたり自殺した。わずかに残った中の一人、上総馬屋原庄にいた義重の十六世の後裔光忠が、ゆえあつて、備後国に謫せられ、早くから備後志麻利庄に住していた有井城の馬屋原氏(平氏系馬屋原)に預けられた。



固屋城跡

有井城の馬屋原は捨ててもおかれず、小島に固屋(小屋)を造りこれに住ませた。これが固屋城馬屋原氏の初代である。

光忠は、その後赦されて固屋を修理増設して城のごとくになった。有井馬屋原氏の分家のように言う人もあるがそうではない。後年(数代のち)有井城の馬屋原に嗣絶えたととき、固屋馬屋原弘光(弘満)の男の宗正が跡を継いでこれより二姓一家とも言われ同族のようになった。

第二代は廣季で左衛門太夫といい、また、廣秀と記したのもある。

第三代は綱村で廣季の男である。備後守を称した。

第四代は季廣で綱村の男である。秀廣と記したのもある。越中守と称した。

第五代は弘光で季廣の男である。弘満と書いたものもあり左衛門尉といわれ、また治部大輔ともいわれた。従五位下に叙せられていた。(以下次回)

志麻里風土記 続(九)

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」

(承前)

第六代は光元で弘光の長男である。次男元正は父弘光と共に有井城に移り、有井城八代の宗弘に嗣がなかったの、しばらく弘光が家事を見、のち元正に跡を継がせた。

第七代は義盛である。光元の子で備前守を称した。義盛には三子があった。

第八代は義綱で、義盛の長男である。左衛門太夫、また四郎兵衛尉とも言った。弟に石見守義茂・左馬介光信がいた。

第九代は義勝で義綱の男である。左衛門太夫を名乗った。

第一〇代は範政。義勝の男で左衛門太夫を名乗り備前守を称した。天文十一年(一五四二)三月二十五日、吉川元春・小早川隆景・穴戸隆家・天野隆重・桂元政

志道上総介らが、この範政の居城で軍議を開いたという。『郡誌』範政には三子があつて、長子義政が跡を継いだ。

第一一代は義政で、左衛門太夫といい、また、美濃守を称した。天文二十年(一五五二)奴可郡高尾城で討死した。時に六十九歳。嗣なく相合元綱の嫡男元範が跡を継いだ。義政の弟義俊は越中守を称した。同じく義平は左近太夫と言つたらしいが、共に詳細は不明。

第一二代元範。前記のように義政に嗣なく、毛利元就の庶弟(毛利弘元の六男)相合元綱の嫡男(八男との説もある)元範が跡を継いだ。左衛門太夫、また兵部少輔を名乗った。

第一三代元詮。元範の長男元政(元正とも書かれる)が九鬼城馬屋原の正成の跡を継いだので、元範の跡は次男の元詮が嗣いだ。元詮は四郎兵衛と言われ、後年は法鉢となつたようである。毛利氏の防・長移封に従つ

て萩に移つた。萩に移つた元詮の子は三家を立てた(別紙系図参照)ようであるが、これは本稿の主目的ではないし、資料もないので触れないこととする。

この固屋城系の馬屋原氏については、右に述べた以外わからぬ。菩提寺もどこであつたかわからない。固屋城の近くに宗安寺・重げん寺・宝勝寺等があつたようであるが、いずれも早く廢寺となつており何も残っていない。

(四)九鬼城の馬屋原氏 有井馬屋原氏の項でも述べたが、有井城一〇代春宗には、正国・元政の二子があり、大永年中(一五二二〜二七)尼子氏と大内氏が備後を争つ

た時、正国は尼子に従つていたが、元政は大内に従うと言ひ、兄弟不和となり、正国は有井城を出て備中平川の紫の城の平川氏の許に寄寓した。神石郡誌の記載による

と正国は紫の城の城主平川三郎左衛門の掣となり、平川弾正忠観実と名乗り布賀村に住したとある。

平川氏は毛利氏に属して功績があつたので、毛利家に断つて正国を志摩利に帰した。帰郷した正国は九鬼に築城してこれに移つた。時に永正六年(一五〇九)



▲九鬼城跡

であつた。これが九鬼城の初代である。但馬守を称し、但馬守正国の名は中世郷土史上の代表的人物である。諸種の文書にその名が見えるが、信ずるに足るもの、信じてたきものさまざまである。正国は大永年中小畑の八幡神社を再建したという。また同じ頃小畑村妙現宮をも再建した。これは九鬼城の丑寅の方角、いわゆる鬼門防護の為の再建とあるから、現在の岩屋の妙現宮のことと思われる。さらに大永七年(一五二七)には岩屋山能救寺を再建して、能救山岩屋寺と改号したという。これについては大永年中能救寺が大破に及んだ時、正国の母能救院禪尼が大願主として造営した。地毗庄の山内氏も禪尼の縁で扶助したともいわれる。そのため岩屋寺には山内土佐守通資と同上野守通忠の位牌を立てている。能救院禪尼は山内家の出である。(以下次回)

志麻里風土記 続(十)

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(八)

(承前)

正国は毛利氏に属していた。

元龜二年(一五七一)から天正八(一五八〇)に至る、織田信長の石山本願寺攻め(いわゆる石山合戦)の際、本願寺は末寺、門徒に合力を依頼したことは勿論であるが、中国の雄将毛利氏に援助を乞うた。毛利氏は部下の諸将に対し、領内真宗寺院と協力して、援助をするよう命じた。

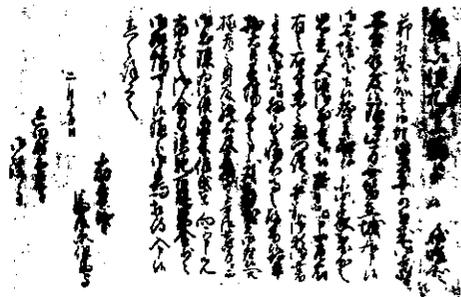
この時正国も、郡内近田村(現油木町近田)正光寺とともに、鉄砲百挺、金子貳百両、米貳百俵を送って援助をしている。この時、正国から正光寺への連絡の書状と、その援助に対する本願寺からの軍忠状とが、

正光寺に保存されている。参考までに次に掲げる。

但馬守書状

態々以使札呈一輪候〇〇〇(虫喰不明)極暖和之節相成候処其御地御平安可被成御寺勢安否承度候隨而此方無替在城居申候御安堵可被下候然者阿府小田家悪心之思立ヨリ大阪御本寺江被〇〇〇(不明)申上左右有之右ニ付末々惣門徒江兵糧御頼御書至來御互ニ扱々心痛不易之致旨候何卒拙者共其場ニ望ミ申度存心ニ者御座候へ共極老之身故躰不及是非共貴寺御苦勞御出陣為御供家來佐武差向可申候当座之御合力鉄砲百挺米金少々御加情可申候隨分御手柄持八候恐々謹言
小畑九鬼城主
馬屋原但馬守
二月拾日
近田村正光寺
御院主

図1



但馬守書状

本願寺軍忠状

- 一、鉄砲 百挺
- 一、金子 貳百両
- 一、米 貳百俵

但し四斗三升入

本願寺為軍用右之通御合力被申候御門跡様江及言上申候処至而忠節之助情神妙不淺被思召也依右後日何時成共願望之儀有之候節者此由可申出候其節望之通御免被成下候間此上隨分御加情可被申様被仰出候也仍之為後々

日如件

天正二年

西三月二日

刑部郷法橋

頼兼卿

上野法眼

正秀卿

備後国神石郡近田坊

正光寺了達坊

同小畑村九鬼之城主

馬屋原但馬守殿

同家御家中

図2



本願寺軍忠状

以上の如くである。図2の正国の書状でもわかるが、この時正国は相当の老齢であったようである。それが当然で、正国が九鬼に築城して移った時を、かりに二十歳としてみてもこの時八十歳ということになる。高田文庫「向永谷馬屋原家系図」(福山城鏡櫓文書館蔵)や「岩屋寺の位牌」には、正国は享祿元年(一五二八)八月十日に死んだと書かれているが、これは信じ難い。図2のように天正二年頃の書状に、はつきりとその名が見えるのである。(以下次回)

志麻里風土記

続

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(九)

(承前)

一本古城記には、正国は御調郡の丸門田の城主上里丹後守の次男を養子にしたが、引越しの砌九鬼城が落城したので、その養子仁兵衛という者は油木村へ引込んで郷土となったとある。

「神石郡誌」には、落城の際正国は切腹したとも書かれている。また、現油木町法泉寺には、元禄七年に寺の宝物を書き出して京都本願寺に提出した差出し状に、天正の頃御調郡丸門田村の上里の城主三好丹後守の三男仁兵衛吉政が、小島九鬼城の馬屋原但馬守正国の養子に入ったが、その時九鬼城落城で油木に落ちたが、その時彼が寺に納めた槍・陣鍋・茶釜・弓が列記されているという。

「西備名区」には、これは次の宗治の代の事ではないかと書かれているし、「備

後古城記」福田本には「正国には宗治という男あり此説不審」とある。正国には宗治のみならず多くの子女があった(本稿初回の系図参照)のだから、養子を迎える必要は考えられないし、

事実正国の長子宗治が跡を継いでいる。西備名区にいう宗治の代のことではないかという説も、宗治の跡はその子正成が継いでおり、この養子説はにわかには信じ難い。

「備後太平記」には「服部合戦之事」に「太平記」載として、観応二年(一三五)の服部合戦の記事がある。その中に「……宮下野守兼信入道……只百騎ばかりになりにつけり。兼信四方を屹と見て、言ひ甲斐なき奴原かな、よしよし足手まとひに何かせん、落失せたるこそ幸ひなれ、敵いまだ人馬の息を休めぬひまに、いざや蒐散さんと言ふまに、馬の鼻をならべて蒐出す其の人々には子息次郎氏信、馬屋原但馬守正国(小島の城主也)村田左衛

門、同名次郎、高尾九郎元長、時に馬屋原正国、先陣として何の会釈もなく、数千騎の中へ真一文字にかけ入り、向かふ敵を二三騎切つて落せば、近づく者もなく其外の人々も乗り掛け乗り掛け責め給ふ……略」とある。

観応二年といえは、但馬守の九鬼城築城より百五十年余り前である。石山合戦の時の本山から出た軍忠状の日付の天正二年からすれば二百二十年余りも前のことで、とても同じ人物とは考えられない。この服部合戦に出てくる但馬守の方が違うのではなからうか。右の天正二年の軍忠状にその名が見えるし、大永年中から天正の初め頃まではたびたび但馬守の名が出てくるから、この時代の但馬守の方がほんものではなからうかと思われる。以上九鬼城初代但馬守正国について述べたが謎の多い人物ではある。正国の室は久代上総介(西城・槌山城)の女である。

第二代宗治、正国の嫡男

である。鶴丸といい、また蔵人丞を称した。初め尼子に属していたがわけあって大内方となり毛利に従った。それで尼子は新宮党を攻め入らせ、北方を攻め磨け九鬼城を攻めた。宗治微勢で叶わず大矢(大矢城)に退いた。尼子は九鬼城に番兵を置いて引き揚げた。宗治は大矢にあって、固屋・有井と牒し合せて尼子の番兵を追い退けて帰城したという。宗治の室は初め長井氏の女、後宮下野守の女であった。

正国には多くの子女があった。次男宗正は有井城一代元政の跡を継いで二代城主となったが、隠居して梨迫城に移り、その跡を弟宗春(正国三男)が継いで有井一三代城主となった。四男正香は五郎監物とい坂田城主(深津軍坂田村)として永禄十二年(一五六九)の神辺合戦に参加している『立石定夫・杉原盛重』「西備名区」には「神石郡志摩利 流品治部宮内城主宮下野入道縁族にて天文三

年毛利候宮城を攻め給ひし時一族俱に籠城す。宮氏降参退去の後、退いて毛利家に従い、後神辺城主杉原盛重の旗下となる」とある。また正国には一女子があつて同苗光治の室となつたとあるが、光治の名は二つの系図には見えない。支流でもあろうか。(以下次回) (参考文献は最後にまとめて掲載する)

(三月号所載の本稿の終わり部分に、岩屋山能救寺の再建について、「西備名区」の記載を引用して、「但馬守正国の母能救院禪尼が大願主となつて造営した。地毗庄の山内氏もその縁によつて扶助したともいわれる」と書いたが、これについて現岩屋寺住職から、「岩屋寺の位牌、その他の旧記に、能救院禪尼の名は見えない。山内上野守通忠(正国の母の居所)の位牌に、能救院殿とあるのが誤り伝えられたのではなからうか」との話があつたので、ここに追記しておく。)

志麻里風土記(続)

中世における郷土の豪族 「馬屋原氏考」(一〇)

(承前)

第三代正成、初め左衛門太夫と稱したが、後彈正左衛門成廣と改稱した。(向永谷馬屋原家系図)では宗治・成廣・正成となつてい

るが、成廣と正成は同一人物である) 天正三年(一五七五)毛利氏が備後に討入り宮下野守入道の宮城を攻めた。入道は近隣の土に加勢を乞うた。時に馬屋原一族は大内に属していたが、宮氏は一族故に見捨て難く、左衛門太夫(正成)、四郎兵衛尉監物らは宮勢に加勢した。ところが宮下野守入道が軍中で急死し、そのあと城中一和せず、その子若年の宮若狭守、同宮内少輔ら降参したので、正成らも退いて毛利へ前過を詫び、毛利もこれを許し所領を安堵された。この時備後諸士の大半

が毛利に服従した。

尼子はこれを怒り、備後一円を手に入れようと、尼子式部太夫を将として三千余騎にて、天正三年(一五七五)備後に攻め入り毛利に属した諸城を攻めた。諸城主あるいは降りあるいは退去し、ついに尼子軍は志摩利に押し入り、九鬼、固屋、有井の三城を攻めた。

この時宮城に、毛利の番兵として古志景勝が多勢で籠っていたので、正成ら馬屋原勢はこれに援兵を乞うた。古志は時を移さず援兵を出して龜石に陣を布いた。尼子は勢を四手に分けて攻撃した。ある雨の激しい夜、三城と古志勢は牒し合せて包囲の尼子軍に夜討ちをかけた。不意を衝かれた尼子勢は乱れて敗走したが、多勢なのでまた盛り返して攻め囲んだ。

この時毛利は西方の諸士に命じて多勢の援兵を送らせたので、遂に尼子軍は退去した。三城の将士ら追討ちして多くの首級を獲たと

いう。

第四代元正、元正は固屋城十二代元範(相合元綱の嫡男)の嫡男である。元成に嗣子がなくその跡を継いだものである。元正は次衛門または元之、あるいは元政とも言った。備中守と稱し、文禄二年(一五九三)朝鮮の役に毛利に従い彼の地で戦死した。

第五代重治、初め次右衛門、後重治、春時とも言い春重と書いたものもある。備前守と稱した。天正年中元正の時、秀吉の山城廃止の令が出されて、諸城主は山下に屋敷を構えて住んだ。重治は固屋城の麓に屋敷を構えて住んだという。久鬼城主が何故固屋城下に屋敷を構え住んだのか、固屋城主はどうしていたのか、研究すべき問題と思う。

重治は若い時から父元正に従って諸々の合戦に参加し、文禄の朝鮮の役には父と共に彼の地に渡り、父の戦死後帰国して、関ヶ原の陣後毛利氏長州に移封後浪

人して、芦田郡府中に隠れ住み、大阪動乱の時大阪に赴いたが、落城後国に帰り潜み再び府中であつて病没した。

第六代重頼、采女正重頼と稱し、父重治と共に大阪の陣に赴いたが、帰国して府中に住み、後、品治郡向永谷村に移り住んだ。重頼の舍弟重俊は毛利に供奉して長州に移った。

以上が九鬼馬屋原氏の系譜である。九鬼馬屋原の菩提寺については、「西備名区」には龜石南泉寺を馬屋原氏の菩提寺であるとして馬屋原氏世々の石塔寺山の内にありと記しており、また岩屋寺と同じく位牌ありと記している。「神石郡誌」墓碑の章には岩屋寺が菩提寺で、下記の如き九鬼城主五代の位牌を建てていと書かれている。

初代 享徳元年八月十日没
前但州大守香林浄梅大居士

但馬守正國岩屋寺中興開基

二代 弘治三巳四月三日没
鶴丸藏人承宗治

前侍中大岳宗綱大居士

大永七丁亥岩屋寺再建諸堂普請

三代 天正五丑十月十五日

前左金吾孝道賢忠大居士

龜丸左衛門太夫正成

四代 文禄二巳十月十八日

前備州大守清林宗梅大居士

次右衛門備中守元正

五代 元和二辰十月二十五日

前備州大守靈山教化大居士

次右衛門備前守重治

室 桂室妙教大禪定尼

重春之室

以上である。

岩屋寺は寺領二百貫を大内氏から寄附され、毛利氏の時も同様附置されたが、福島正則がこれを没収した。

(以下次回)

志麻里風土記 続

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(十一)

(承前)

九鬼城馬屋原氏の菩提寺については前号において触れたが、その墓所は従前岩屋寺の東方約三〇〇メートルの会下谷にある五輪塔群がそれだと言われている。無銘の五輪塔(数基の宝篋印塔を含む)が六〇基とも九〇基とも言われている。近隣に、他にそれらしいものもないし、一応これを九鬼馬屋原一族の墓と伝えてはいるが、神石郡を代表する豪族であり、志摩利十郎村を支配し、五千石とか三千石とか言われた城主の墓としてはいかにも貧弱で、これでは筆者には但馬守とその一統が気の毒に思えてならない。

六〇基とも九〇基とも言われる五輪塔の数の多さ

も、九鬼馬屋原五代一〇〇年のものとすれば問題はあ
るのだが、これは度重なる
合戦に討死した部下の墓や
供養塔と考えれば十分首肯
できることではある。戦死
した部下の追善供養をおろ
そかにするような武将には
部下になるものはないな
る。だから名将と呼ばれた
武将は戦死した部下の供養
を大切にしたり、さらに敵
方の戦死将士の供養塔を建
立した武将も多かったもの
である。(この五輪塔群に
ついては、筆者はかつて馬
屋原氏と尼子氏の戦いにお
ける両軍の戦死者の墓また
は供養塔ではないか、とい
う仮説を紹介したことがあ
る。)

以上九鬼城馬屋原氏につ
いて述べた。

(五) 大矢城馬屋原氏

大矢城は九鬼城の枝城と
いわれる。有井城一〇代の
春宗の舎弟治盛が大矢に築

城して移った。これが大矢
城馬屋原の初代である。

治盛は、はじめ三郎と言
い、のち中務小輔立花介と
称し、尼子に属した。

第二代成高。(盛高とし
たものもある。)成高は有
井城十一代元政の男である
が、なぜか治盛の跡を継い
でいる。中務太夫と称し
た。

大矢城の馬屋原氏はこの
二代で終りである。

このあとへは龜石(大谷



▲大矢城跡

城)から川上李之進秀政が
入ったが、これは馬屋原氏
を嗣いだものではないので
川上氏については述べな
い。

なお、「神石郡誌」には、
小輔(治盛)には三子が
あって長子は大矢城で病
死、二男は大矢野田に下
り、三男は油木に落ちた。

そのあと川上李之進が入っ
たとあるが、これは郡誌の
記載が治盛と成高の順序が
逆になっているので、三子
があったのは二代成高では
ないかと考えられる。

(六) 梨迫城の

馬屋原氏

梨迫城は有井城の枝城で
ある。

別項「平民系の馬屋原氏
(有井城系)」のところで述
べたように、有井城十一代
元政が石州大森に所替えに
なって移住した跡へ、久木
城の初代但馬守正国の次男
宗正(政)が入り、十二代

城主となったが、故あって
梨迫城に隠居したようであ
る。これが梨迫城馬屋原氏
の初代である。

第二代宗忠。藏人丞を名
乗った。

第三代宗吉。馬屋原四郎
宗吉と言った。毛利氏長州
移封に従って長州萩に移
る。その子孫萩にありとい
われる。(以下次回)

(参考文献は後日まとめて
掲げる。)



▲梨迫城跡

志麻里風土記 続編

中世における郷土の豪族
「馬屋原氏考」(十二)
(承前)

(七) 女鍋城の
馬屋原氏

女鍋城は油木町仙養ヶ原の西端にあり、「神石郡誌」には「馬屋原但馬守、馬屋原熊四郎の居、尼子に属し毛利勢のために落城すとも云ふ。」とある。但馬守がここに住したことがあったかどうか、また、熊四郎が但馬守とどういう関係であったかわからないが、志摩利流馬屋原氏の支流であろうことは間違いないなからう。

女鍋城山麓の正光寺の縁起に「女鍋城主熊四郎は非常に性格が粗暴で、人々は鬼四郎と呼んでいた。妻女が信仰厚く絶えず寺詣りするのを、熊四郎は住職に逢いにいくのだと怒り、妻女の帰りを邀して切り伏せ



▲女鍋城跡

た。熊四郎が城に帰って酒を飲んでいると、殺害した筈の妻女が帰ってきた。不思議に思って調べてみると、寺の本尊阿弥陀如来が身替りに立たせられたことがわかり、前非を悔い改めて信仰の道に入った。老体におよび谷へ下り柿の木に隠居し、のち久鬼馬屋原流を養子とした。」とある。(原文はいま少し長文のものであるが、筆者が要約した。)

但馬守の名が出たり、久鬼馬屋原流を養子としたと

あることから志摩利流馬屋原の一流であろう。

(八) 龍王山城



▲龍王山城跡

小畠の町はずれに、固屋城の出城とも、九鬼城の出城とも言われる龍王山がある。これは誰かの居城というのではなく、敵の攻撃をうけるような事態になった時、ここに砦を築いてできればここで撃退し、またはしばらくここで支えてその間に本城の備えを十分にしたものであろう。城主がないのだからここにあげる

必要もないとも思ったがついでに記した。
常光の高木城、中城も右同様有井城の出城と思われる。

以上が志摩利流馬屋原氏の系譜と事蹟である。以上に取り上げたもの以外にも、幾人かの人物名が諸資料に散見するが、系図中のどこに入るべき人物かわからない。

この稿に記したものはまことに微々たるもので、多くのものは深い歴史の谷間に埋没し、永い時間の彼方に忘れ去られてしまっているようである。現時点で筆者の知り得た資料を整理統合して、この小考をものにしたのであるが、極めて不備で不十分であることは、筆者自身痛いほどわかっている。今後何となくかしてより正しくより確かな馬屋原氏に迫りたいと思う。御叱正を仰ぎたいし、多くの資料の出現をまつものである。

附記

本稿を草するにあたり豊松村井平軍治氏から一部資料の供与と助言を受けた。また、左記の文献を参考にさせて頂いた。ここに附記して深くお礼を申し上げます。

参考文献

- 「神石郡誌」「同統編」「西備名区」「備後古城記浜本鶴資本」「同福田禄太郎本」「立石定夫氏・杉原盛重」「田口義之氏・山城志第八集備後の山城」「県教委油木豊松民俗資料緊急調査報告書(河合正治氏)」「萩藩閥閥録」「萩藩諸家系譜」「高田文庫八向長谷馬屋原家系図」「吉岡立郎男・正光寺と石山合戦」「備中府志」

(この稿を広報に載せて頂くこと十二回、ちょうど一年で最終回となりました。長い間お目通し頂きましたことまことにありがとうございます。お礼申し上げます。)

三和町文化財保護委員

松井正夫